

21:5 ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。

21:6 「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」

21:7 そこで、彼らはイエスに尋ねた。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。」

21:8 イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行ってはならない。

21:9 戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。」

21:10 そして更に、言われた。「民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。

21:11 そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる。

21:12 しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。

21:13 それはあなたがたにとって証しをする機会となる。

21:14 だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。

21:15 どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。

21:16 あなたがたは親、兄弟、親族、友人にまで裏切られる。中には殺される者もいる。

21:17 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。

21:18 しかし、あなたがたの髪の毛の一本も決してなくならない。

21:19 忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。」

終末のしるし

<福音書のなかの黙示録>

きょうのテキストはイエスが黙示思想を語るめずらしい箇所でも呼ばれています。また3つの福音書（マタイ、マルコ、ルカ）が同じ構成になっています。注記に表にしましたので参照してください。マタイ、マルコは新共同訳の見出しは同じです。ルカだけが「大きな苦難」のところを「エルサレムの滅亡予告」と変更していますが内容は同じです。ルカの特徴として異邦人向け福音書といわれます。異邦人向けにわかりやすく福音を表現したといえますが、しばしば、福音の中身を薄めている、ユダヤ臭さを消している印象を受けます。きょうの箇所もマルコやマタイに比べると、ところどころ非ユダヤ的な表現に変更しています。別の言い方をすれば黙示録的なことばを嫌って別の言い方にかえているということになります。

<わたしの見解>

わたしは黙示思想が苦手です。その理由はユダヤ教の嫌なところ、えげつないところが黙示思想にでていて感じるからです。黙示思想のいわんとしていことは「選民がさいごに勝つ」に尽きます。悪は滅び正義は勝つの選民バージョンー選ばれし者が勝利するーですが、その勝利は人間の力で得るものではなく、ただ神の超自然的な力による勝利です。現実的に敗北し続けるイスラエルの民は最後は神の力によってユダヤ人だけが勝利する。非ユダヤ人は敗北する、これが黙示思想の根幹です。

もう一つの理由はオカルト的表現が多いことです。蒼ざめた馬だとか、666や14400人などの意味ありげに数字のイメージをつかうところがオカルトに感じてしまうので苦手です。

日本の教会で黙示録の説教を聴いたことはわたしはありません。ほとんどの

日本の礼拝では（表向きは）説教されないのではないのでしょうか。ただ、神学生のとくに韓国人留学生と雑談していたら、黙示録が好きだときいて驚いたことがあります。韓国では人気の説教題目が黙示録だそうです。そういわれるといぜん台湾人牧師のエゼキエル書の説教を聞いたことがあり、そのときわたしもつい興奮してしまいました。韓国人、台湾人には現代の日本人にはない感受性があるのかなあと思いました。

キリスト教の歴史のなかでも黙示録は問題の書でした。聖書の正典に取り入れられますが、その経緯にもけっこう悶着がありました。黙示録はいらないと考えていた人たちが少なくなかったということでしょう。現代でもけっこう好き嫌いのはっきりする聖書の箇所ようです。

<預言者から黙示者へ>

ユダヤ教の歴史の中で預言から黙示に変わってくる過程が旧約聖書の中にもうかがえます。バビロン捕囚のあたりから、預言というより黙示のことばを語りだしているようにわたしは思えます。歴史上のイスラエルは政治的、軍事的に敗北を重ねるにつれて預言のことばに従うよりも黙示のことばで宗教的な勝利を祈る民に変容しているのではないかとおもうのです。適切な区切りかどうかは自信がありませんが、エゼキエル書以降の書物は預言書というより黙示的な要素が強いように思います。仮に黙示思想を敗北から生まれた弱者の思想であるとするなら、それは同時に非・戦争の思想でもあります。実際の戦闘になると弱いものは負けます。イスラエルは常に戦闘をおこなわない非戦の民ではありませんでしたが、戦闘に負け続けたことで非戦の思想をつちかってきたという見方もできます。イエスもまた戦闘を好まないひとりでした。

<告別説教>

告別説教といえば、ヨハネ福音の14-17章の最後の晩餐の席でのイエスの長い説教が有名ですが、きょうの箇所も小黙示録であると同時にイエスの告別

説教になっています。マルコ・ルカの福音書では、この訓話の後まとまったイエスの語録はありません。またイエスのことばの中で黙示思想を語ることはこの告別の箇所以外にはほとんどありません。ついでながら多数のパウロ書簡の中にも黙示思想を語る箇所はありません。少ないから価値がないというのではなく、逆に、少ないからこそ意味、価値があるともいえます。よく読んでみるとイエスの告別のことばの中には黙示録的なことばはでてきますが、ヨハネの黙示録に特徴的な象徴をつかっているの比喻や、数秘的な数字の使い方（わたしの苦手とする）はありません。

<希望>

キリスト教の希望といえば、終末における希望です。現在のキリスト教の各教派のなかで黙示思想をもとに希望を語ることは少ないようです。ヨハネ福音書で語られる「よみがえり」「永遠のいのち」をキリスト教徒の希望としているところがほとんどではないかと思えます。黙示思想をもってそれを希望とするとオカルト・原理主義だと批判の的になるでしょう。だれもハルマゲドン（最終戦争）を望みはしません。

弱者が語る時に黙示思想は平和の思想でありうるのですが、強者が黙示思想を語りだすと最終戦争の思想になる可能性があります。わたしたち一人ひとは弱くはかないものです。状況によってはそれは永遠に続く状態かもしれません。しかし、世界を見渡せばキリスト教徒であるということにとてつもない強者であるのです。これは比喻でもなんでもなく粛々たる事実です。このことを忘れずにきょうのテキスト、イエスのことばを受け止めてください。

<注記>

見出し	マルコ 13 章	マタイ 24 章	ルカ 21 章
神殿の崩壊を予告する	○	○	○
終末の徴	○	○	○
大きな苦難を予告する	○	○	×
エルサレムの滅亡を予告する	×	×	○
人の子が来る	○	○	○
いちじくの木の話	○	○	○
目を覚ましていなさい	○	○	○